＜2015年度　第1回定例研究会＞

地域の暮らしをささえる医療と福祉の連携
～帯山校区の実践報告

シンポジスト：
　那須　久史（社会福祉士・ささえりあ帯山　センター長）
　米満美恵子（地域住民・民生委員会長）
　川邊　由佳（在宅療養看取り経験者）
　宮﨑　久義（おびやま在宅クリニック　院長）
コーディネーター：
　黒木　邦弘（本学社会福祉学部　准教授）

日　時：2015年10月10日（土）13時30分～15時30分

2015年度第1回定例研究会では、「地域の暮らしをささえる医療と福祉の連携～帯山校区の実践報告」というタイトルのもと、那須久史氏（社会福祉士・ささえりあ帯山センター長）、米満美恵子氏（地域住民・民生委員会長）、川邊由佳氏（在宅療養看取り経験者）、宮﨑久義氏（おびやま在宅クリニック 院長）をシンポジストとしてお招きし、本学社会福祉学部准教授の黒木邦弘氏にコーディネーターを務めていただきました。以下、その概要を報告いたします。

＊　＊　＊

熊本市の帯山校区では、福祉事業所と地域が連携した町内単位のサロンを立ち上げ、在宅で看取ることを支える医療機関によるサロンの実践など、最後まで地域に暮らし続けることを目指した先駆的な取り組みが行われている。その具体的な実践について、まず、「ささえりあ帯山」のセンター長である那須久史氏から、帯山中校区、各小学校区においてどのようなニーズがあるかを汲み取り、町内単位の具体的な活動の協議を行ったという報告が為された。

次に、帯山2町内にお住まいの民生委員の米満美恵子氏からは、民生委員20年のご経験から、誰もが気軽に集えるサロンのようなものの必要性を痛感され、町内サロンを立ち上げた試みの報告がなされた。お茶とお菓子を提供して、自由に話したり、血圧測定をしたりなど、「地域のお茶の間」として仲間づくりを目指した。「ほがらかサロン」という名前で、チラシを作って周知に努め、7月30日に第1回のサロンを開催。その際に痛感したのは、何か新しいことを始めるときには、「自治会とのつながり」の重要性であったということである。質疑応答を通して、この自治会との連携は経済的側面からも大きなサポートになるということであった。

続いて、今度は、在宅で末期ガンの恩師を看取った川邊由佳氏からの報告である。川邊氏は、87

歳の元大学教授の恩師（配偶者は死別、子どもはなく、親族は遠方に在住）を縁あって、泊まりこみで今年 1 月末から 4 月中旬に恩師が在宅で逝去されるまで看取られた。最初は入院生活だったが、末期がんの恩師が家で死にたい、という願いを看護師に伝え、その結果「家が病院になる」ことが実現された。川邊氏は、当初、症状の悪化や看取りを経験していないことへの不安もあった。しかし、週 2 回の訪問診療に、週 2 回 90 分の訪問看護、月曜から金曜まで 1 日 3 回の訪問介護によって、実際に「家が病院」となった。それらサポート機関は、すべて 24 時間対応で、本当に信頼できた。恩師は自宅で自分のペースで、リラックスして過ごし、最後を迎えることができた。「自宅で死にたい」という恩師の信念が貫き通せたことを教え子として幸せに思うということであった。家族がいなくても「家で死ぬこと」を諦めなくていいこと、そのために何が必要なのかを考えるように課題をもらったと締めくくられた。

最後に、その在宅診療機関である「おびやまクリニック」院長の宮﨑久義氏から、開業から 3 年半の実践報告がなされた。まず、在宅医療の概念についてわかりやすく示され、家に帰ると元気になる「在宅パワー」について話された。宮﨑氏は、自宅で療養できる選択肢、最後を自宅で迎える選択肢を示していくことが、ご自身の実践の意味として強調された。また、現在、地域の保健室として、金曜日の午後 2 時から 5 時に気軽に健康相談できる「サロンおびやま」を開設されことが紹介された。

＊＊

シンポジストの報告終了後は、フロアを交えての活発な質疑応答が行われた。実際に介護中の方、経験者の方、行政の方など、ともに地域で生きる人々の知見や問いが共有される時間となった。

最後に、コーディネーターの黒木邦弘氏から次のようなまとめと展望が示された。那須氏による町内単位のニーズの汲み取りや、米満氏による「ほがらかサロン」、そして、宮﨑氏の在宅診療や「サロンおびやま」のような実践的な個々人の行動、それによって地域の中で看取りをできた川邊氏の実践は、「最後まで」地域に暮らし続けるための、いわば先駆的な行動である。そうした個々人の実践には、集団レベル、組織レベル、そして制度・政策レベルでの援助が不可欠だ。そのためには、今後、医療や地域や福祉の領野でどのように連携しながら、個々人の実践を支えていくのかを問うていくことが必要である。

地域の具体的な実践の報告から、喫緊の問題を共有し、ともに考えていこうとする本研究会は、盛況のうちに閉会した。研究会のアンケートにも、非常に有意義なものとして評価され、このようなテーマで引き続きの開催を期待したいとあった。

（研究会報告担当者：萩原修子）